
白骨山（しらほねやま）

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しほのやま
白骨山

【コード】

N7010I

【作者名】

栗原峰幸

【あらすじ】

自殺するために故郷の保田を訪れた惣一。実家の民宿に住み込みで勤める美しい女性、久美に「白骨山へ行け」と言われる。惣一が白骨山で見たもの、それはかつて村の娘を襲って食べたと言い伝えられている鬼だった。

「君の開発したノラボンだけだね。中毒患者が急増しているんだ。この四神製薬始まって以来の不祥事だ。実際に被害者からの訴訟にまで発展しているんだよ。やはり君には会社を辞めてもらわなきゃならないな。間違ってもらっちゃ困るよ。これは依願退職だからね」
そう高水惣一は製薬部長から言い渡された。惣一が心血を注いで開発した抗うつ剤、ノラボンは次々に中毒患者を出したのだ。惣一は目の前が真っ暗になった。

F 大学薬学部を卒業してから、この四神製薬に就職し、会社のためを思い、また患者のためを思い、一途にノラボンの開発に没頭してきたのだ。時には挫折しそうになることもあった。それでも惣一は会社と患者のために尽くしてきたのだ。

「まあ、依願退職の場合、退職金が支払われるから、それがせめてもの恩情だと思いたまえ」

しかしながら、四神製薬に勤めてまだ五年の惣一にとって、退職金など微々たるものだ。それが今まで会社に貢献してきた対価かと思つと、灼熱の悔しさが込み上げてくる惣一であった。

惣一は四神製薬の中庭で、涙を堪えながら辞令を握り締めた。

惣一がF 大学薬学部に入學したのも、新薬を開発し、名声を上げることがもちろん、病気に苦しむ患者を救いたかったからだ。だからこそ彼は大学でも研究に没頭し、人生のすべてを新薬開発に注いできた。それが今、脆くも崩れ去ってしまったのだ。それは、彼の人生の否定そのものであった。

（もう、他の製薬会社も俺を雇ってはくれないだろう。俺に何が残っているというんだ……）

握り締めた退職辞令を手に、惣一の双眼からは、悔しさと絶望の涙が溢れていた。

それから何日が過ぎたであろう。惣一は内房線に乗っていた。季節は六月、梅雨の合間に晴れ間が覗いた日だった。

惣一は保田という駅で電車を降りた。この保田は彼の故郷である。この保田駅から少し金谷側に戻った元名というところに彼の実家がある。惣一の実家は民宿で、海水浴のシーズンなどは、それこそ満室になることも珍しくない。実家の民宿には綾瀬久美という遠縁の女性が住み込みで働いていた。わけありのようで、もう民宿に勤めて三年になる。年の頃は惣一より二歳下だった。それは惚れ惚れするような美しい女性であった。

惣一は実家に帰ろうかとも思う。だが、「今更、帰れる身の上でもないな」とも思うのであった。惣一は鋸山を見上げた。それは保田から金谷側にそびえる、山頂が鋸のような形をした山だ。惣一は幼少の頃より、この鋸山を見て育ったのだ。

惣一の足は鋸山に向かった。金谷側からはケーブルカーでその山頂まで登れる鋸山だが、保田側からとなると、自分の足で登らなければならぬ。登山道はすべて石段となっており、途中で日本寺の料金所がある。この鋸山は山全体が寺の境内となっており、拝観料が必要なのだ。汗をかきながら惣一は石段を登り、料金所で拝観料を払った。もうすぐ大仏である。

大仏に到着した惣一は、そこで一休みすることにした。飲み物を買って、汗で出てしまった体内の水分を補給する。平日にも関わらず、年配の観光客がちらほらと見受けられた。空が異様に高く、抜けるような青さだった。惣一は憎らしげに空を見上げる。そして、視線を大仏へと移した。大仏は慈悲深い眼差しをしており、惣一を見下ろしている用でもあり、東京湾を眺めているようでもあった。

「はあ……」

惣一は深いため息をつく。山頂目指して歩き始めた。大仏から先は一層傾斜が険しくなる。それでも惣一は息を切らしながらも登った。かつては軽々と登った鋸山だが、研究室に籠っているうちにこんなにまで体力が衰えてしまったかと実感する惣一であった。だ

が、人生最後の登山くらいは自分の足で登りたいとも思っている惣一であった。

山頂は地獄のぞきと呼ばれ、北壁が切り立った崖になっている。山頂に着いた惣一はすぐさま地獄のぞきへと足を向けた。そう、惣一はここから身を投げるつもりでいたのだ。

地獄のぞきの景観はまさに絶景であった。垂直に切り立った崖に遠くを見れば、東京湾観音も眺めることができた。

(これが……、俺が最後に見る景色か……)

惣一が転落防止用のフェンスを乗り越えようとした時だった。

「すみません。シャッターを押してもらえませんか？」

振り返ると壮年のカップルがカメラを手に笑っていた。

「あ、ああ、シャッターね……」

惣一は呆けたように返す。そして、カメラを受け取ると、雄大な景色をバツクに壮年のカップルをフレームの中に収めた。

その時だった。ちょうど、中年の観光客がドツとケーブルカーの方面から押し寄せてくるではないか。あっという間に山頂は人の山となった。

(畜生。これじゃ、自殺どころじゃないぜ……)

仕方なく、惣一はもと来た道を引き返し始めた。中腹の大仏はまるでしたり顔のように笑っていた。下山すると、民家の屋根に猿の群れがいた。その猿たちは惣一を一瞬、睨むと山の中へと消えていった。惣一は猿にまで疎まれていくような気分になった。

惣一が実家の民宿に帰ったのは、鋸山を下山し、元名海岸を少し散歩してからであった。

「あら、惣一さん！」

出迎えてくれたのは綾瀬久美であった。

「旦那様、女将さん、惣一さんが帰ってこられましたよ！」

久美は明るい声が響いた。久美は気立てがよく、性格も明るい。

どのような経緯でこの民宿に勤めることになったか、詳しくは知ら

ない惣一であったが、好感の持てる女性だった。

「おう、惣一、どうしたんだ。ひよっこり帰ってきて。仕事、忙しいんだろ？」

奥から惣一の父親、源蔵が顔を出した。

「ああ、仕事ね。クビになっちゃったよ」

「何？」

「リストラってやつだよ。俺の開発した薬で中毒患者が出たんだ。あっさりクビさ」

そう言つと、惣一は小さなリュックをつまらなさそうに、ドサツと下ろした。

「じゃあ、お前、これからどうすんだ？ まだ東京のアパートは引き払ってないんだろ？」

「まだ、この先のことは考えていないよ。まあ、フラツと故郷が懐かしくなつてね……」

「そうか。今日は平日だし、予約客もないから、ゆっくりしていけ」

源蔵はそれ以上、惣一に何も聞かなかった。ただ、久美が心配そうな顔をしていた。

惣一は荷物を放り出すと、物置小屋に仕舞つてあつた、釣竿を取り出し、元名海岸へと向かった。釣竿と言ってもそれは延べ棒である。釣具店で餌のアオイソメと簡単な仕掛けを買い求め、元名海岸に突き出す堤防へと向かったのだ。

堤防の向こうは磯場となつており、様々な魚が生息している。子ども頃より、惣一はこの堤防で釣りを楽しんだものである。

魚からの返事は芳しくなかった。それでも、時々釣れてくるネンブツダイという雑魚を相手に、久々の釣りを楽しんでいる様子だ。

「どう、釣れる？」

その声に振り向くと、そこに久美がいた。久美は優しい笑顔を湛えながら、バケツを覗き込んでいた。

「雑魚ばっかさ」

「それでも、可愛らしい魚ね」

久美はバケツの中の魚を手で一匹掬い上げた。それは、白魚のよ
うな指に捕まえられて、ピチピチと跳ねている。

「あーあ、黒鯛でも釣れないかなあ……」

惣一は子どもの頃、ここで一度だけ黒鯛を釣ったことがある。そ
の時の思い出が鮮明に甦る。あの時は父親の源蔵が黒鯛を刺身にし
てくれた。惣一にとっては良き思い出であった。

「死ぬってことは、思い出も一緒に消されるってことよ」

久美がネンブツダイをバケツの中に返しながら呟いた。

「え？」

「惣一さん、死ぬ気でしよう？」

惣一はその久美の言葉にギクリとした。竿を危うく海中に落とし
そうになる。いつもは明るいつ久美が、その時ばかりは真剣な表情を
していた。

「ど、どうしてそんなこと……」

「瞳を見ればわかるわ。その瞳は死を迎える直前の動物の瞳よ」

惣一には返す言葉がなかった。ただただ、思いつめたように竿先
をみつめる。すると、大きなアタリがググツと伝わった。

「おおっ……！」

だが、抜きあげられた魚は、黒い身体に黄色い線の入った、ゴン
ズイであった。

「なんだよー、ゴンズイかよ」

ゴンズイとは鱗の棘に毒があり、不用意に触れると、棘に刺され
ることから、釣り人の間でも嫌われる魚の部類に入る。

惣一は「ちっ」と舌打ちし、釣り糸を切った。針を外すのに、棘
に刺されては自分が痛い思いをするからだ。針を飲み込んだゴンズ
イは堤防の上で、ビチビチと跳ねた。惣一はそれを靴で蹴って、海
中に落とした。

「可哀想、針も外してもらえないなんて……」

久美が海中を覗き込みながら言った。

「君は知らないだろうけど、あの魚には毒があるんだ。触れないよ」
惣一は少しむくねながら言った。そして、釣り道具を片付け始める。

「あーあ、今日はシケてるなあ。ネンブツダイとゴンズイだけだ」
惣一はやや恨みの籠った声で呟いた。

「惣一さん、なんでそんなに死にたいの？」

久美が惣一の瞳を覗き込む。久美の瞳は真つ直ぐに見つめられないほど奥行きが深かった。惣一は視線を逸らす。

「俺は今まで、新薬の開発に心血を注いできた。その新薬が中毒患者を次々に出しちまっただ。治験では問題なかったのに……。新薬の開発は俺の人生のすべてだった。俺の生きる場所は、もうこの世にはないのさ」

「そう……」

久美が瞳を伏せた。惣一は苛立つ自分の心を鎮めることができなかった。釣竿を畳んで、堤防を去ろうとしていた。

「そんなに死にたいのなら、白骨山に行つてごらんさい」

惣一の背中に久美が投げかけた。

「白骨山……」

白骨山とは保田にある山で、それほど標高は高くない。かつて、そこには鬼が棲み、村の娘をさらっては食っていたという伝説が残っていた。

久美は呆けた表情で固まる惣一の脇を抜け、足早に去っていった。久美は遠縁と聞かされているだけで、その素性は惣一もよく知らなかった。謎の多い女性であった。

「今日はやっぱり泊まらないよ」

そういい残して、惣一は実家の民宿を後にした。小さなリュックサックを撫でる。そこには首を吊る縄が入っているのだ。

「白骨山か……」

夕暮れ時はとうに過ぎ、辺りは宵闇が支配していた。惣一の足は

白登山へ向かっていた。それは小高い丘を一回り大きくしたような山なのだが、木々が鬱蒼と茂り、暗澹たる惣一の心をより一層、暗くした。

山の中腹に差し掛かった頃だろうか。惣一の目に小さな灯りが飛び込んできた。よく目を凝らすと、灯りは一つではない。おぼろげな灯りがいくつも点在している。

(こんな山の中に、一体何だ?)

惣一は訝しげに首を傾げた。振り返ると、海にはイカ釣り漁船の灯りが煌々と燈っていた。

惣一は意を決して、おぼろげな灯りの正体を確かめようと、山を登った。

そこにあつたのは寂れた小屋だった。そう、まるで山小屋のようだ。電気は引いていないのだろう。ぼんやりと燈る灯りは行灯かもしれないと惣一は思った。

「こんなところに山小屋なんてあつたかな?」

惣一は訝しげな顔をしながら、小屋の中を覗き込んだ。すると、そこには多数の若い娘が着物姿で俯いているではないか。

「やっぱり来たのね」

惣一の後ろで声がした。確かに今まで惣一一人だった筈だった。背後に人の気配など感じてはいなかった。だが、振り向くとそこに久美がいたのだ。

「く、久美さん!」

「そんなところで覗いてないで、中へ入ったらどう?」

「ここは、一体……?」

久美はそれには答えず、扉を開けた。そして、惣一を中へ招き入れる。

「みんな、お客さんだよ」

威勢のいい久美の声が響いた。すると、中にいた娘たちは、一斉に惣一に注目する。虚ろだった娘たちの顔が一斉にほころんだ。

「きゃーっ、殿方よーっ!」

娘たちは一斉に惣一に群がった。惣一は娘たちに揉みくちやにされる。娘たちは惣一の服を脱がそうとしているのだ。

「ちよ、ちよつと、やめてくれーっ!」

「みんな、やめなさい。気持ちにはわかるけど……」

久美が娘たちを嗜めた。すると、娘たちは惣一から離れた。

「そろそろ、あいつが帰ってくるわ」

すると、娘たちは悲壮な表情を湛え、俯いてしまった。

「久美さん、これはどういうことなんだ？ それに『あいつ』って一体……」

「しっ!」

久美の顔に緊張が走った。久美は全身で周囲の気配を感じているようだ。微動だにせず、空気の流れを読んでいる。

「あいつが帰ってきた。さあ、惣一さんは隠れて!」

「俺は自殺志願者だぜ。怖いものなんかないね」

「あいつの怖さは桁違いよ。さあ、ここに隠れて!」

久美は襖を開けると、そこへ入るよう惣一を促した。久美の目つきは真剣だった。仕方なく、惣一は久美の指示に従うことにした。

襖の中は黴臭く、かなり湿気が多かった。それに狭い。惣一は身体を屈めながら、息を殺した。

「おう、今帰ったぞ」

ドスの利いた野太い声が響いた。小屋の入り口の扉が軋みながら開く音がする。すると、ズシン、ズシンと足音が響き渡った。

襖には小さな穴が開いていた。そこから惣一は小屋の中を見ることができた。そーっとその声の主を確認する。そして、惣一はその姿を見て驚愕し、思わず叫び声を上げそうになった。

声の主は床にドスンと座った。真っ赤な顔に毛皮の腰巻、そして頭には二本の角が生えている。

（鬼だ……!）

そう、それは紛れもなく鬼の姿だったのである。

鬼が座ると、若い娘たちが鬼に群がる。鬼は「酒だ!」と叫び、

娘たちに酒を注がせた。そして、グビグビと飲み始めたのである。

「久美、今日も獲物はなしか？」

「はい。今時、若い娘、ましてや生娘などをそう簡単にさらってくることができません」

「肴が欲しいのう……。生きた生娘を食らうのは僕の唯一の楽しみじゃて」

鬼はそう言うのと、酒をグイと煽った。

「その代わりと言ってはなんですが、男を連れて参りました」

「男？ 男など不味くて食えんぞ」

「その男に生娘をたぶらかせ、連れて来させる……。そういう筋書きはどうでございますか？」

「ふーむ。で、その男はどこにいる？」

「ここにございます」

そう言つて、久美は襖を開けた。その中では恐怖に震える惣一がいた。齒はガチガチと鳴り、全身からは脂汗が滴っていた。

鬼は惣一に近づいた。生臭い息が惣一に吹きかかる。

「お前がのう……。この小屋の秘密を知ったからには、必ず生娘を連れてこい。さもなければ、お前は燻して乾燥させて、酒の肴だわ。まあ、男は不味がのう」

鬼がドスの利いた声で、惣一に迫った。

「あ、は、ひいっ……!!」

「ここにいる娘たちは、かつて僕が食らった娘たちの魂よ」

「そ、それって幽霊……」

「まあ、そんなところだ。僕に食われて成仏もできぬ。だからここで虜にして、酒の相手をさせているわけよ」

鬼が豪快に笑った。

「白骨山の鬼の伝説って、本当だったんですか？」

惣一は久美を見ながら言った。ならば久美もかつて鬼に食われた幽霊なのだろうか。

「かつて『ご主人様』は保田の村の生娘をさらっては食べていた。

この山は白骨で埋め尽くされた。だから『白雪山』と言つものよ」

久美が惣一を見下ろして言った。

「ご主人様……。すると久美さんは鬼の仲間？」

「私は生きた人間よ。生娘じゃなかったから食べられなかっただけ。私の身体は汚れているからね。ただ、生娘を連れてくる役割を担わされたつてわけ」

「じゃあ、今度は俺が……？」

「そうよ。生娘をたぶらかしてここへ連れてくるの。ご主人様のためだね……」

「そ、そんな……」

「一度、死んだ人間なら何でもできるでしょ？ 惣一さんには選択権がないの。わかる？」

惣一は顔面蒼白だ。第一、誰が生娘かなど、今の時代、外見では判断できぬ。それ以上に、鬼に人を食らわせるなど、とてもできそうもない惣一であった。

惣一が震えていると、久美が優しく寄り添った。

「ところで惣一さん。そのリュックの中に、いい薬が入っているでしょう？」

「え？」

久美は無理矢理、惣一のリュックを奪った。そこから錠剤の入った小瓶をいくつか取り出す。それは惣一が開発した新薬、ノラボンと自殺のために用意した睡眠薬、それに向精神薬だ。

「ご主人様、この男は『酒を美味しくする薬』を持っております」

「ほう、酒を美味しくするとな……」

鬼が小瓶を取り上げる。

「そ、それは……」

惣一が喋ろうとした瞬間、久美が惣一をキッと睨んだ。

「それを酒に溶かすのでございます。さすれば生娘を食えぬ憂さも晴れましよう」

「どれ……」

鬼が小瓶から錠剤を掌に、ポロポロとこぼす。そして酒の入った樽に放り入れた。錠剤はクルクル回りながら溶けていった。鬼は杓に酒を酌むと、ゴクゴクと飲み乾した。

「ふむ、なかなかない味だな。まあ珍味ぞい」

そう言つて、鬼は更に酒を酌む。調子付いた鬼は酒をたらふく飲んだ。赤い顔がより一層赤くなる。

「そろそろ効いてくるはず……」

久美が口元に薄笑いを浮かべて呟いた。その直後だった。

「うーん、酔っ払っちまった……。おかしい、天井がグルグル回る。それに身体がしびれる……」

鬼はだらしなく身体を投げ出した。久美が惣一のリュックを弄つた。

「ふふふ、自殺グッズは役立つものよ」

久美の手には惣一が自殺をするために用意した縄が握られていた。「何をボヤツとしてるの。惣一さんも鬼の首を絞めるのを手伝いなさい！」

既に鬼は意識が朦朧としている。久美はその鬼の首に縄を掛ける。久美が右の端を、そして惣一が左の端を掴む。

「いいわね、いくわよ」

久美のその合図に、惣一は渾身の力で縄を引いた。久美も思い切り縄を引っ張る。鬼の首に縄が食い込んだ。

「ぐえええええ！」

鬼は縄を解こうとするが、身体に力が入らないのか、首まで手が持ち上がらぬ。鬼の目は突出し、口からは生臭い涎が垂れていた。

惣一は尚も力を緩めることなく、縄を引っ張り続ける。やがて、鬼の手がブランと垂れ下がった。

「死んだのかな？」

「このくらいで死ぬなら、苦労はしないわ。気を失っているだけ。さあ、この鬼を運ぶわよ」

久美は鬼の身体を持ち上げようとするが、その巨体はピクリとも

動かない。惣一も鬼を持ち上げようとする。しかし、少し身体が浮くくらいだ。幽霊の娘たちが駆け寄ってきた。するとどうだろう。彼女たちは軽々と鬼の巨体を持ち上げたのだ。

「さあ、こつちよ」

久美は小屋の扉を開け、娘たちを誘導する。鬼を担いだ娘たちは小屋の外へと運び出す。

「どこへ連れて行く気だい？」

惣一が疑問に思ったのも不思議ではあるまい。久美たちはこの鬼をどこへ連れていくのだろうか。

「二間島よ」

「元名海岸の沖にある、あの小さな二間島かい？」

「そうよ。あそこから鋸山の大仏の力を借りるの」

「大仏の力？」

「あの大仏は東京湾を護るために建立されたの。そこに鬼の邪気が入り込めば、大仏の力が借りられるわ」

娘たちの鬼を運ぶスピードは速かった。久美も惣一も駆け足で、鬼を担いだ娘たちを追う。

もうすぐ、元名海岸に到着するという時だった。

「お前らーっ！」

鬼の意識が戻ったのだ。怯えた娘たちが鬼を落とした。鬼は立ち上がるうとするが、惣一の薬がまだ効いているのだろう。足元はおぼつかない。

「く、くそー……」

鬼は千鳥足で久美と惣一の方へ向かってくる。

「久美、この際、生娘でなくてもよいわ。おのれを食らって……」

久美と惣一は保田海岸を元名海岸の方へ逃げた。無論、その後を鬼が追う。娘たちは復活した鬼に恐れ戦き、ただ震えていた。

久美と惣一は元名海岸までたどり着いた。惣一が釣りをした、あの堤防である。その脇には小さな漁船が停泊していた。久美と惣一

は迷わず、その漁船に乗り込むと、もやい（縄）を解いた。惣一は小さい頃から櫓を漕ぐのが得意だった。

「みんな、勇気を出すのよ。その鬼を沖の二間島まで連れていくの！」

久美が震えている娘たちに向かって叫んだ。

「でないよ、あなたたちは永遠に成仏できない。この鬼の虜よ！」すると娘たちは、渋々ながら鬼を担いだ。

「こら、お前たち、儂に逆らうのか！」

鬼が怒鳴る。娘たちは鬼の手足を掴み、海の上を渡っていく。その後を久美と惣一を乗せた漁船が追う。

「うおおおおーっ！」

鬼が叫んだ。するとどうだろう。鬼の姿は見る見るうちに大きな蛸の姿に変わっていくではないか。

「あ、あれは……！」

惣一が恐れ戦く。

「そう、伝説の大蛸よ！ かつて保田の海に君臨し、海を護ると嘯いて、生娘を生贄に差し出させていたという大蛸よ！」

「鬼の正体は大蛸だったのか！」

大蛸は八本の脚をくねらせ、次々に娘たちを追い払っていった。

その様はまさに悪鬼の如しだった。娘たちは無体にも、その脚で打ち払われていく。

「うおおおおーん！」

大蛸は怒りに震えながら吠えた。二間島は目と鼻の先だった。

すると突然、大蛸の脚の一本が伸び、久美を捕えた。

「この娘、よくも裏切ってくれたわ。よいか、これから毎日、生娘を生贄としてこの海に捧げる。手始めは久美じゃ！」

「きゃーっ！」

「くくく、観念せい。お前は生娘ではないが、裏切った罰じゃ。食らってやるわ」

久美の体中には吸盤が巻き付き、身動きがとれないでいる。久美

は海中に引きずり込まれそうになり、もがき苦しんでいた。

「久美さん！」

惣一は目に一本の銛が入った。漁船に積んであった銛である。惣一はそれを掴むと、果敢にも海へ飛び込んだ。

大蛸の脚は巻かれ、今にも久美をその尖った嘴に運ぼうとしているところだった。大蛸は久美に涎を流し、惣一など眼中に入っていない様子だった。

(蛸の急所は目と目の間……)

惣一は銛の狙いを大蛸の目と目の間に定めた。

「くそーっ！」

惣一は渾身の力を込めて、大蛸に銛を突き刺した。それは目と目の間を完璧に貫いていた。

「うぎゃーっ！」

大蛸の絶叫が響いた。途端に脚に力がなくなり、久美を放す。惣一は久美を抱えて、漁船へと引き揚げた。久美は気を失っていた。そして、もう一度海中へと潜る。

大蛸は全身の力が抜けたように、その身をダランと放り出し、潮の流れに翻弄されていた。惣一はその大蛸の頭を掴むと、二間島の方へと泳いでいった。

夜明けが近かった。東の空が白みかけている。

惣一は二間島に大蛸を載せた。そして鋸山の方を振り返る。

「大仏様、鬼は、大蛸は退治したぞーっ！ どうすればいいんだーっ！」

惣一が叫んだ。すると鋸山の中腹、ちょうど大仏の辺りから一筋の光が大蛸に向かって伸びた。その光を浴びた大蛸の胴体が割れた。蛸は頭と思われている部分が胴体なのだ。

すると、その大蛸の胴体から人魂のような光が点に向かって伸びた。

「ありがとう、惣一さん。私たちを解放してくださって……」

海上に漂う娘たちが、惣一に頭を下げた。

「み、みんな……」

「久美さんをよろしく願います」

そう言い残すと、娘たちの身体が透けていく。ようやく鬼に食われた娘たちの魂が開放されたようだ。惣一はその時、「迷わず成仏するがよい」という大仏の声を聞いた。

朝日が差し込んだ。すると、二間島の上に横たわっていた大蛸の身体が見る見るうちに朝日に溶けていく。

惣一は二間島の上で大仏の方を見つめた。それは鋸山の中腹から、少しだけ顔を覗かせていた。

「やっぱり、ここを去るのかい？」

身支度を終えた久美に惣一が尋ねた。久美は無言で頷く。

「駅まで見送るよ」

「その必要はないわ。この町を出て行く前に鋸山へ行くから……」

「なら、俺も一緒に登るよ。大仏様にお礼を言わなくっちゃ」

そう言っつ惣一は久美の後を追った。実は惣一は心配だったのである。久美の背中に、昨日までの自分と同じ匂いを感じていたのだ。

(まさか、久美さん、自殺するつもりじゃ……)

そんな疑念を抱きながら、惣一は久美の後を追った。久美は黙ったまま何も語らなかつた。

一晩寝ていない惣一の身体は異様にだるかつた。それでも、久美のことが心配で石段を登った。

丁度、心字池に着いた時だった。

「ねえ、私、東京に住んでいたんだけど、集団レイプされたの」

久美がぼそつと呟いた。

「え？」

「でも、そのお陰で鬼に食べられなかつたんだけどね。私の犯した罪は大きいわ。きつと大仏様も許してはくれない……」

「何人、鬼に食わせたんだい？」

「五人……」

「そっか……。でも、あの鬼に縛られていたんだ。仕方ないよ」
「惣一さんは私の魂も解放してくれたわ。そのことは感謝しているわ」

久美の瞳は虚ろだった。まるで生気がない。この時、惣一は久美を山頂まで行かせてはならないと直感した。

「兎に角、大仏まで行こう」

久美は静かに頷き、また歩き出した。心字池から大仏までは直ぐである。

大仏は静かに座していた。そして慈しみ深い瞳を湛えている。

大仏を前に、久美はひれ伏した。周囲にいた数名の観光客は何事かと、久美に注目した。

「許されるわけ、ないわよね……」

久美が呟く。

「いつか、あの鬼を倒すチャンスを探っていたけど、五人も犠牲にしてしまった。私の罪は深いのよ」

そんな久美の肩に、惣一はポンと手を乗せた。

「地獄のぞきまでは行かせないよ。鬼に食べられ、非業の死を遂げた娘たちのためにも、久美さんは生きながら生涯をかけて罪を償っていくんだ」

久美が涙でクシャクシャになった顔を上げた。

「どうせ、鬼の話なんて、誰も信じちゃくれないさ。俺たちだけの秘密にしよう」

惣一が手を差し伸べる。久美は恐る恐る手を重ねた。すると、惣一はグイと久美を引き寄せた。

「民宿に残ってくれよ。俺、民宿を継ぐからさ」

久美の口が「への字」に歪んだ。そして、惣一に縋って号泣した。その泣き声は鋸山を越えて金谷まで届くかと思われた。惣一はそんな久美を思い切り抱きしめた。

八月。海水浴客で民宿が賑わうシーズンだ。今日も惣一の実家の

民宿には沢山の泊り客が押し寄せていた。

「いらつしゃいませ」

明るく客をもてなす久美がそこにいた。

そこへ、市場から戻った惣一が帰ってきた。

「お客さんたち、今日は朝獲れのいいアジが入りましたよ。金色の居着きのアジでさあ。夕飯時には親父が刺身にしまさあ」

惣一が白い歯を覗かせて笑った。泊り客たちから喝采が上がる。

「どうです、まだ夕飯までは早いから、元名海岸でもう一泳ぎするか、鋸山でも登ってみちゃあ。鋸山の太夫を拝むとご利益がありますよ。よかつたら女房の久美と一緒に案内しますよ」

泊り客たちが笑った。

「なんだ、久美さん、若旦那と結婚しちゃったのか。俺、目を付けていたんだけどなあ」

泊り客の一人がふてくされる。他の客はヤンヤヤンヤと惣一と久美を囃し立てた。

久美も気恥ずかしそうにはにかんだ。

午後の元名はのどかだった。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7010i/>

白骨山（しらほねやま）

2010年10月8日15時05分発行